

Readings

וַיֵּרָא אֵלָיו יְהוָה בְּאַלְנֵי מִמְרָא וְהוּא יֹשֵׁב פֶּתַח־הָאֵהָל כְּחֵם הַיּוֹם: Gen 18:1

וַיֵּשָׂא עֵינָיו וַיֵּרָא וְהִנֵּה שְׁלֹשָׁה אַנְשִׁים נֹצְבִים עָלָיו וַיֵּרָא וַיֵּרָץ לְקִרְאָתָם מִפֶּתַח הָאֵהָל וַיִּשְׁתַּחֲוֶה אַרְצָה: Gen 18:2

וַיֹּאמֶר אֲדֹנָי אֲסֹנָא מְצֵאתִי חֵן בְּעֵינֶיךָ אֶל־נָא תַעֲבֹר מֵעַל עַבְדֶּךָ: Gen 18:3

יִקַּח־נָא מֵעֲטָמִים וְרַחֲצוּ רַגְלֵיכֶם וְהִשְׁעֵנוּ תַּחַת הָעֵץ: Gen 18:4

וְאִקְחָה פַת־לֶחֶם וְסַעְדוּ לְבַבְכֶם אַחַר תַּעֲבֹרוּ כִי־עַל־כֵּן עֲבַדְתֶּם עַל־עַבְדְּכֶם וַיֹּאמְרוּ כֵן תַעֲשֶׂה כַּאֲשֶׁר דִּבַּרְתָּ: Gen 18:5

וַיִּמְהַר אַבְרָהָם הָאֵהָלָה אֶל־שָׂרָה וַיֹּאמֶר מַה־רִי שְׁלֹשׁ סָאִים קָמַח סֹלֶת לְוִישֵׁי וְעֵשִׂי עֲגוֹת: Gen 18:6

וְאֶל־הַבְּקָר רֶץ אַבְרָהָם וַיִּקַּח בֶּן־בְּקָר רֶדֶד וְטוֹב וַיִּתֵּן אֶל־הַנְּעָר וַיִּמְהַר לַעֲשׂוֹת אֹתוֹ: Gen 18:7

וַיִּקַּח חֲמָאָה וְחֹלֵב וּבֶן־הַבְּקָר אֲשֶׁר עָשָׂה וַיִּתֵּן לַפְּנִיָּהֶם וְהוּא־עֹמֵד עֲלֵיהֶם תַּחַת הָעֵץ וַיֹּאכְלוּ: Gen 18:8

וַיֹּאמְרוּ אֵלָיו אֵיךְ שָׂרָה אֲשַׁתְּךָ וַיֹּאמֶר הִנֵּה בְּאֵהָל: Gen 18:9

וַיֹּאמֶר שׁוּב אָשׁוּב אֵלֶיךָ כִּיעַת חַיָּה וְהִנֵּה־כֵן לְשָׂרָה אֲשַׁתְּךָ וְשָׂרָה שָׁמְעַת פֶּתַח הָאֵהָל וְהוּא אֶחְרָיו: Gen 18:10

אֵלָיו Gen 16:5, 18:9, 19:33, 33:4, 37:12, Num 3:39; 9:10; 21:30, 29:15, Dt 29:28, 2Sam 19:20, Isa 44:9, Ez 41:20, 46:22, Ps 27:13; "Mashorah of BHS", p.153. "dots"

Col 1:24 Nūn χαίρω ἐν τοῖς παθήμασιν ὑπὲρ ὑμῶν καὶ ἀνταναπληρῶ τὰ ὑστερήματα τῶν θλίψεων τοῦ Χριστοῦ ἐν τῇ σαρκί μου ὑπὲρ τοῦ σώματος αὐτοῦ, ὃ ἐστὶν ἡ ἐκκλησία,

Col 1:25 ἧς ἐγενόμην ἐγὼ διάκονος κατὰ τὴν οἰκονομίαν τοῦ θεοῦ τὴν δοθεῖσάν μοι εἰς ὑμᾶς πληρῶσαι τὸν λόγον τοῦ θεοῦ,

Col 1:26 τὸ μυστήριον τὸ ἀποκεκρυμμένον ἀπὸ τῶν αἰώνων καὶ ἀπὸ τῶν γενεῶν - νῦν δὲ ἐφανερώθη τοῖς ἀγίοις αὐτοῦ,

Col 1:27 οἷς ἠθέλησεν ὁ θεὸς γνωρίσαι τί τὸ πλοῦτος τῆς δόξης τοῦ μυστηρίου τούτου ἐν τοῖς ἔθνεσιν, ὃ ἐστὶν Χριστὸς ἐν ὑμῖν, ἡ ἐλπίς τῆς δόξης.

Col 1:28 ὃν ἡμεῖς καταγγέλλομεν νουθετοῦντες πάντα ἄνθρωπον καὶ διδάσκοντες πάντα ἄνθρωπον ἐν πάσῃ σοφίᾳ, ἵνα παραστήσωμεν πάντα ἄνθρωπον τέλειον ἐν Χριστῷ.

Luke 10:38 Ἐν δὲ τῷ πορεύεσθαι αὐτοὺς αὐτὸς εἰσηλθεν εἰς κώμην τινά· γυνὴ δὲ τις ὀνόματι Μάρθα ὑπεδέξατο αὐτόν.

Luke 10:39 καὶ τῆδε ἦν ἀδελφὴ καλουμένη Μαριάμ, [ἡ] καὶ παρακαθεσθεῖσα πρὸς τοὺς πόδας τοῦ κυρίου ἤκουεν τὸν λόγον αὐτοῦ.

Luke 10:40 ἡ δὲ Μάρθα περιεσπᾶτο περὶ πολλὴν διακονίαν· ἐπιστᾶσα δὲ εἶπεν· κύριε, οὐ μέλει σοι ὅτι ἡ ἀδελφὴ μου μόνην με κατέλιπεν διακονεῖν; εἶπε οὖν αὐτῇ ἵνα μοι συναντιλάβηται.

Luke 10:41 ἀποκριθεὶς δὲ εἶπεν αὐτῇ ὁ κύριος· Μάρθα Μάρθα, μεριμνᾷς καὶ θορυβάζῃ περὶ πολλά,

Luke 10:42 ἐνὸς δὲ ἐστὶν χρεία· Μαριάμ γὰρ τὴν ἀγαθὴν μερίδα ἐξελέξατο ἣτις οὐκ ἀφαιρεθῆσεται αὐτῆς.

Comments

- 今日は年間16主日。イエスはエルサレムに向かう旅を続けている。福音朗読では先週の良きサマリア人のたとえに引き続いて、10章からイエスと食事をするマルタとマリアが読まれている。アラマイ語で女主人を表す名のマルタ(מַרְתָּא)とマリア(מַרְיָם)という二人の姉妹が、イエスを自分の家に迎えた物語である。マルタは忙しく働いているが、一方のマリアはイエスの足下に座って話を聞いたままでもてなす仕事をしない。そこでマルタはイエスに不平を言って妹のマリアにも仕事をするよう忠告を頼むという不思議なエピソードだ。するとイエスはマルタに「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない(41節)」とマリアを擁護している。また同時にマルタは取り立てて叱責されて否定されているようでもない。食事を準備してもてなすマルタとイエスの言葉を聞くマリアのどちらがよいか、初代教父たちも議論している<sup>1</sup>。そこで、この解釈が難しそうな物語をわれわれは第一朗読の創世記を比較しながら検討してみよう。
- 第一朗読は、アブラハムの天幕に三人の客人が現れた物語が取られている。アブラハムの妻のサラに子どもが生まれないので、子孫を「海辺の砂のように増やそう(創22:17)」と神がアブラハムに約束した契約(17章)の危機が物語の背景にある。物語に戻ると、アブラハムが暑い真昼に現れた三人の客人に食事を振る舞おうとしている。では、もてなした上等な小麦でできたパンや子牛の料理のすばらしさ、あるいは三人をもてなす丁寧な態度のゆえに、10節で息子イサクの誕生がご褒美として予告されているだろうか。天幕の入口にこの三人の客人を見たアブラハムをよく見てみよう。2節には「目を上げて見ると」「[見た וַיִּרְא וַיֵּאמֶר] アブラハムは…走り出て[וַיֵּרָץ וַיֵּלֶךְ] [彼らを]迎え[וַיִּקְרָא אֹתָם] リクラーターム」と、遠くから「見て」「走り寄り」「迎えた」という一連の動詞が、三人の客人とアブラハムの出会いを強く印象づけている<sup>3</sup>。そして3-4節「お客様、どうか(אֵל) ナー)よろしければ、どうか(אֵל) 僕のもとを通り過ぎないでください。[どうか אֵל) 水を少々持ってこさせますから」と懇願を表すことばאֵל)が三度くり返され、三人の旅人が天幕を通過せずに立ち止まってどうにかして共に食事をするように、アブラハムが懸命になって引き止めているのが分かる。そしてアブラハムの妻であるサラは、「(パン菓子)をこしらえなさい וַעֲשֵׂי וְאֵל) ヴァアーシー(直訳: そして行え)」「料理させた לְעֹשֶׂת אֹתָם(直訳: 行うために)」「できたての עֲשֵׂי אֵל) (直訳: 行った)」と、マルタのように忙しく働いたことが「行う עֲשֵׂי אֵל) という三回繰り返される動詞を使って表現されている。なぜ、それほどまでにアブラハムは食事をさせようとこだわっているのだろうか。宗教的な観点から見ると、神を表す三人の客人との食事は神人供食儀式、つまり神と人の間で交わされる契約締結を意味している。例えば、シナイ山で十戒を与えられた時、神と民は「食べまた飲んだ(出19+24章)」。人は神を食べさせて満腹させなければならないのだ。そして10節aで「あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう וְהָיָה בְּנֵי אִשְׁתְּךָ לְךָ」という契約成就の予告で物語が閉じられている。
- このような、神の人をなんとか引き止めようとするアブラハムと、そのために働き「行う」サラの双方が描かれ、そして食事と契約という伏線を持った第一朗読を踏まえて福音朗読に立ち返ると、マルタかマリアのいずれのもてなし方が優れていたのかといったレベルの話をしているのではない。立ち働いて「行う」マルタによってと食事を共にしたこと、そしてマリアのようにイエスのみことばを聞いて理解することの両者によって、この家で契約が静かに締結されていたことに気づきたい。

<sup>1</sup> Arthur A. Just Jr., "New Testament III, Luke", Ancient Christian Commentary on Scripture, Inter Varsity Press, 2009., pp.181-3.

<sup>2</sup> 新共同訳に訳されていない語を[ ]で補って直訳している。

<sup>3</sup> 先週のC年第15主日の「善きサマリア人」が「その人を見て憐れに思い、近寄って(ルカ10:33-34)」を参照。